

どに、お前は後からゆつくりと來い、南無阿彌陀佛々々々々々々」

と唱名の聲諸共に漲る川中へ既に飛び込まうとする、此の時背後より、

「コレ爺さん危ない、一寸待ち」

「ハイ、何處のお方が存じませんが、死なねばならぬ此の身體、何卒助けると思ふて殺して下さりませ」

「コレ、醫者の藥違ひぢやなし、助けようと思ふて殺せるかいな、一寸待ちなされ」

「イ、エ、どうぞ此の手をお放しなさつて」

「コレサ爺さん、私ぢやマアー待ち」

「オ、貴方は先程のお方で御座りますか」

「マア、こんな處へ投身で死なうとは無分別な事、爺さん氣を確に持ち、金子は番頭が拾ふてる、私が證人ぢや」

「サア貴方はそないに仰しやつて下さつても、先方が知らぬと云ふてでおます、迎も金子は返して下さりますまい」

「いや相對づくでは話が出来ぬ、マア兎角私に附いといなはれ」

と船頭幸兵衛、久兵衛を連れまして本町橋の東詰を北へとつて西の御番所へやつて參りました。濱

側に屯所がありまして、柳の木が植つてあります、夜分になりますと人通りが御座りません、淋しい處で時刻は九時退けで、御門は閉つて潜り門になつて御座ります、押しますと戸が開きますが鎖引と云ふて、鎖の先に分銅が附いて居て自然に門が閉まる様になつて居ります。ガラ／＼と開ける音に門番が出て參りました、

「ハイ今晚はお仕舞やす」

「控へつゝ、何んぢやお仕舞やすとは、其の方等は何者ぢや」

「ハイ、お願ひの者で御座ります、私は櫓濱の上荷差の船頭幸兵衛と申します、又此處に居りますのは、天王寺村の百姓久兵衛と申します、今晩安堂寺町一丁目菊屋治兵衛と申す酒屋で、此の親爺さんが居酒をいたしまして歸りがけ、粗忽にも財布から二十五兩と云ふ金子を取落しました、親爺さんが歸つた跡で番頭が懐中へ入れたのを私が見ました、引返して來て返してくれと申しますと、番頭はそんな金子は知らんと申しますので、私は氣の毒と思ひまして内へ這入つて口を利いてやりました、そうすると番頭が喧しゆう申しますので、此の人はもう要らぬと表へ出しましたが、どうも氣に懸るので後をつけて行くと、安綿橋から身投げをしようとするのを、よろ／＼引止めて伴れて參りました、ヘエ、慥に菊屋の番頭が拾ふて居ります、私が證人でござります、どうぞ其の金子を取返してやつて下さいませ」